

随想

淑徳と中庭

愛知淑徳大学現代社会学部
都市環境デザインコース教授

日色真帆



淑徳中高といえれば昔も今も中庭が記憶に残る場所ではないだろうか。中高新校舎の設計をした者として、その中庭について書いてみたい。

中高新校舎は、私が多羅尾直子と主宰しているタラオ・ヒイロ・アーキテクト、星が丘の大学1号館を設計した日本設計とが共同で設計した建築で、約四年前に設計を開始した。

設計の初期に数多くの案を検討して、細長い中庭を囲む現在の配置が決まった。仮設校舎なしで建替えるにはこの案以外になかったと思っている。設計者として最善と考えていたこの案は、旧校舎の中庭(オレンジ広場)の経験がある先生方にすぐ

に理解してもらえて、様々な意見を頂いた。一方で、既存の校舎群にジグソーパズルのピースをはめ込むような難しい工事となったのだが、ようやく終盤を迎えている。

ところで、学舎に外から守られた囲われた庭というのは定石である。ヨーロッパでは中世の修道院に囲われた庭は欠かせないし、伝統ある大学には美しい中庭が見られる。イスラム学校は整った中庭を囲んでいるし、仏教寺院には回廊で囲われた庭がある。この中庭形式は、建築の歴史の中で繰返し登場する、愛着のあるスタンダードになっている。

中高新校舎の中庭は、各階とも全面ガラスの廊下が面していて、行き交う生徒や

先生の様子がよく見える。窓を開けて声を掛け合う姿も見られる。しばらく眺めていると、誰もいない静かな場面のすぐ後に、弁当、発声練習、合唱、ダンス、トレーニング、記念撮影など、目まぐるしく場面が展開する。それは、設計者の予想をはるかに越える多様さである。この中庭は屋外ではあるが、劇場の中のような華やかな空間になったと感じている。

三月に二期工事が終了すると、中庭東半分のゆるやかな斜面が、体育館下ピロティに続きテニスコートに抜けるようになる。この中庭に、プロムナードのような散策して楽しい側面が加わることを楽しみにしている。ぜひ皆さんに体験して頂きたい。